令和４（2022）年度 富山国際大学外部評価委員会　議事録

Ⅰ　日　時　　令和４（2022）年 12 月 27 日(火) 16:18～18:07

Ⅱ　場　所　　東黒牧キャンパス本部棟２階大会議室（対面）＋オンライン会議（ZOOM）

Ⅲ　出席委員　若林委員、蒲地委員、大橋委員、寺山委員、濱名委員、豊田委員、北嶋委員、清水委員、高野委員　計９名　（欠席：前田委員、岡本委員）

学内参加者　高木学長・子ども育成学部長、大谷現代社会学部長、彼谷運営管理部長、佐藤総合学務センター長、上坂戦略企画部長、松山総合学務センター次長、川本キャリア支援センター長、高橋国際交流センター長、村上地域交流センター長、渡部図書館長、新森情報ｾﾝﾀｰ長・IR ｾﾝﾀｰ長、小比賀事務部長、金岡総務課長[司会]、上滝教務担当課長、石黒学生支援担当課長、若田入試担当課長　計 16 名

１．開会

２．学長あいさつ（高木学長）

本学は令和 6 年度の初めに認証評価を受ける予定。認証評価は法律で定められた制度であり、大学の教育･研究活動が審査される。とりわけ教育がしっかり行われているかという点が問われる。残り１年余りということもあり、大学のさまざまな活動の点検・見直しを進めているところ。本日はそうした観点からも、皆様から忌憚のないご意見をいただきたい。

３．委員紹介

新規委員４名を紹介（蒲地委員、豊田委員、高野委員、前田委員[欠席]）。

４．委員長選出

・富山国際大学外部評価委員会規程第５条第２項に基づき互選により選出。
・寺山委員から若林委員の推薦があり、全会一致で承認。

５．議事（進行：若林委員長）

（１）令和３(2021)年度自己点検評価について（彼谷部長）

・資料１、資料１―【参考１～３】に基づき、自己点検評価の目的、本学における自己点検評価の体制（令和 4(2022)年度からの学長のリーダーシップを強化した組織改編）等を説明。

（２）内部質保証について

〇大学全体の質保証について（彼谷部長）

・資料２－１、資料２―１－【参考】、資料１－【参考１】に基づき、内部質保証の定義、本学における組織改革、自己点検評価委員会のあり方や内部質保証の方針案等を説明。

〇教育の質保証について（佐藤センター長）

・資料２－２に基づき、教育の質保証の趣旨、教学マネジメントの構造、学修成果や教育成果の把握・可視化（成績とリンクした DP 達成度、自己評価シート、能力特性評価テストの活用）等について説明。

【（１）（２）に係る質疑応答】
（豊田委員）DP 達成度を例示する計算結果に誤りがある。
（佐藤センター長）ご指摘のとおり。修正する。

（濱名委員）ＤＰ達成度における各ポイントの解釈部分で「学年平均より上を目指す」というレベル設定の理由が分からない。半分は達成できなくてもよい、あるいは目標達成が 50%前後でもよい、といった考えがあるのか。
（佐藤センター長）今はまだ 4 年間のデータが取れていない状況のため、今後 3・4 年次のポイントが見えてきた段階で、最終到達目標を設定したいと考えている。さしあたりの目安として平均という基準を提示したが、より適切な設定の仕方があればぜひご教示いただきたい。
（濱名委員）平均は相対的な比較のために用いられる指標。5 段階で評価をするのであれば、例えば全員が 4 レベル以上を達成することを目指す、といったあり方が考えられる。関西国際大でも 5 段階評価のうち 4 レベルに 80%の学生が達することを組織目標としている。単年度毎に判断できる、平均ではない目標・基準設定が適切ではないか。また、自己評価シートによる把握・可視化に関し、子ども育成学部にあるように 1 年次より 2 年次は下がることは他大学でもよくある傾向（入学後、自己評価が甘かったものが、2 年次に一度下がり、そこから回復して上昇していく）であり理解できる。一方、現代社会学部を見ると、いくつか問題に思える点がある。例えば、「専門分野で外国語を活用できる」という項目などは、最初から常に下がっていき、3 レベルを下回っており、語学教育と専門教育が恐らくリンクできていないもしくは前者が弱いということではないか。加えて、全体の平均を見ると、3 年次で下がっており、先ほど述べた 2 年次で下がりその後回復するといった一般的な傾向に反し気になる。たまたま 3 年次が特異な学年なのか、3 年次の教育方法・内容に問題があるのか、分かる範囲で教えてもらいたい。
（佐藤センター長）学年別のデータは精査していない暫定値・ダミーデータである。今後、正式なデータが揃った段階で、濱名委員よりご指摘いただいた内容を踏まえ検討して参りたい。

（濱名委員）“マネージメント”の記載について、文科省の中教審における文書でも伸ばし棒は使われていない。“マネジメント”に改めるべき。
（佐藤センター長）承知した。

（３）令和４(2022)年度の現状報告
〇現代社会学部の概況について（大谷学部長）
・資料３－１①＆②に基づき、数理･ﾃﾞｰﾀｻｲｴﾝｽ･AI 教育ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ認定やキャンパス内の森づくりのほか、地域活動・ボランティア、留学・国際交流、クラブ活動や学友会活動の状況等を紹介。

〇子ども育成学部の概況について（松山学部長代理）
・資料３－２①＆②に基づき、学内交流行事や短大との合同大学祭のほか、就職状況、地域活動、シンポジウム、「教育とICT」をはじめとする特色ある活動の状況等を紹介。

〇大学の戦略企画について（上坂部長）
・資料３－３①＆②に基づき、戦略企画部の組織体系、学園情報教育研究センター／情報センターによるスマートキャンパス構想の推進、各種ＳＤＧｓ活動の状況等を紹介。

【全体を通しての質疑応答・意見交換】

（濱名委員）中期計画をどうするつもりか。認証評価の際には当然中期計画のことも項目に入ってくるが、具体的な予定、体系的にどう作っていくのかという見通しを聞きたい。

（彼谷部長）大学としての現行のアクションプランは今年度が最終年度のため、現在、来年度から運用を開始する新たなプランを各部局において鋭意作成中である。

（濱名委員）文部科学省が求めているのは部局からのボトムアップを集積した計画ではなく、むしろ法人として、大学としてどういう姿にしていこうとしているのか、というものであり、それが部局に下りて具体的な行動計画にブレイクダウンされるのがオーソドックスな形。私立学校法でも中期計画の策定が must とされている。まずは理事会や執行部が方針を明確に立てるべきではないか。大学設置基準の改正がこの 10 月に施行され、基幹教員等の新しい概念を踏まえた教員体制のあり方や、大学に裁量が与えられる単位付与のあり方などを考えていく必要があり、ボトムアップの前に法人・大学としての方向性を定めなければ整合性を取るのが難しいと考える。検討を急いだ方がよい。

（高木学長）学園全体での中期計画は作っているが、非常にシンプルなものであり、肉付けがまだ完全にできていない。そういう意味でボトムアップの内容を付け足していかなければ抽象的過ぎるので、現在その作業を進めている。遅れているが、できるだけ早く作成し対応したい。

（蒲地委員）二つの学部で多彩な活動をしており、特に地域に出て色々な活動を行っていることに目を引かれたが、このことと関連して次のことを確認したい。①地域での活動が実践の場だとすれば、理論的な裏付けは予め大学の中で学んでいるのか。②地域での活動は単位として認められるのか。③インターンシップは地域での活動の中に含まれているのか。

（大谷学部長）現代社会学部の例で申せば、正課科目における実習については、ただ地域に出かけ体を動かすだけでなく、理論の面を座学でしっかりと学ぶ科目とリンクさせ実践している。一方、サークル等を含む正課外での活動については、理論よりも実社会での体験を重視している色合いが強い。また、単位化しているインターンシップ科目があるが、事前研修、事後研修を行っており、その 3 本をセットとして単位を認定している。

（松山学部長代理）子ども育成学部についても、講義（座学）で学ぶべきことはしっかりと学ばせており、座学で学んだことと実践の往還を大事に、ということを学部の方針としている。また、地域社会参加活動というものを 1 年次の必修としており、単位として認定している。インターンシップについては、2～3 年次を対象に募集をかけ、選択制ではあるが、参加した学生については単位を付与している。このほか 1 日・2 日単位でインターンシップ活動を行うものもあり、こちらは単位化されないものの、自身の目的や進路に合った活動に参加するものとして推奨している。

（豊田委員）子ども育成学部では 40 名が小学校の教員採用試験に合格するなど多くの人材を送り出しており、教員が不足する小学校教育現場の立場からありがたく思う。このことと関連し、教員採用後、1 年後から 3 年後のフォローや追跡調査を行っているかを尋ねたい。

（松山学部長代理）コロナ禍の前は 3 年間、学校を訪問しフォローアップするということを続けて来たが、コロナ禍に入り訪問できない状況となった。しかしながら（コロナ禍が）改善傾向にあるので、来年度以降、少しずつフォローを再開していきたい。また、ここ 1～2 年、卒業生の中から教員の離職者が出ていない。現場に適応するよう対策を取って来た効果が出てきており、卒業生たちも頑張ってくれていると思っている。今後ともご教示いただきながらフォローに努めていきたい。

（豊田委員）お話のあったように採用されても辞めてしまう人が相当数いる。現場としても、大学と連携していきたい。

（寺山委員）資料２－１－【参考】内部質保証の体制図について、学長のもとにある運営会議、内部質保証委員会、さらにその下にある自己点検・評価委員会はどのようなメンバーで構成されるのか。

（彼谷部長）検討中の体制図であるため確定していないが、内部質保証委員会について言及すると、その役割として、自己点検・評価委員会のあり方（流れ･開催頻度等）が適正かをチェックし、内部質保証に関する改善指示を出す、ということを想定している。このため、（小さな大学であることから、どうしても複数の委員会でメンバーの重複が生ずる可能性はあるが、）学長のリーダーシップを発揮できる組織にしたいと考えている。

（寺山委員）ガバナンスが効く体制をしっかりと取ってもらいたい。

（清水委員）毎年社会福祉士の合格率も高く、両学部において人材の育成･輩出に尽力している、即ち素晴らしい教員がいるということであると受け止めているが、先生方の研究成果の発表の場というものは設けられないのか。あまりオープン・公開されていない印象がある。

（高木学長）個々の教員が各々の専門分野の学会等において論文を発表しているほか、大学として紀要を発行・公表しているので、こちらも発表の場となる。こうしたものについて学内で発表会をするといったことまでは行っていないというのが現状である。

（清水委員）県内・県民の皆さんにもっと知ってもらうことで富山国際大学の存在価値もより高まるのではないかと考える。

（北嶋委員）現場の保育士として見て、富山国際大学の教員には、富山県の幼児教育や保育をどうにかよくしようという熱意を感じる方が多い。本日午前中の幼児教育センターの会議でも宮田教授と同席したが、さまざまな会議でも先生方と関わりがある。現場と共に保育を研究し、現場に還元してくれる教員が多く、ありがたく思う。県の保育士会で実習生指導の研修を行った際に、富山国際大学の教員にもお声がけしたところ2名の参加があり､「次年度は学生も参加させたい」との申し出もあった。現場の職員と大学（教員）との連携に学生も加わり、富山県の子どもたちを一緒に育てていく意識やサイクルが生まれているものと思う。自分たち現場の人間にとっても学びとなっているが、またそれを学生さんたちに学んでもらうような場を提供していきたい。

（大橋委員）3点質問したい。①フィールドワークの取組み、とりわけ社会の課題である空き家対策に目を向けているのは素晴らしいが、空き家が増えていく社会的な背景や要因、さらには対策について深掘りしたうえで取り組んでいるのかを問いたい。②現代社会学部には現在495名の学生が在籍しているが、日本人学生の数と留学生数の内訳を知りたい。③大学にとって学生がいかに成長し・満足しているかという点は重要であるが、学生の満足度がどのように推移し、それが学生の成績や、大学を志望する高校生の数に何かしら影響を与えているのか否か、そうしたことを把握しているのかも含めてお聞きしたい。

（大谷学部長）コロナ禍の影響もあり正規の外国人留学生の数は少なく、5名在籍している。内訳は、中国が3名、ネパールとベトナムが各1名。学生の満足度については授業アンケートを毎学期取っているところだが、うち授業に対する総合評価は、ほぼ全ての授業で5点満点中4.2以上と比較的高い。また教員の熱意という項目では4.5程度と高く評価してくれているものと受け止めている。しかしながらこのことと入学者数との相関関係までは分析できていないというのが正直なところ。

（上坂部長）空き家に関しては、根本的な対策までいかない段階での活動がメインとはなっているものの、例えば空き家を活用してどのように地域を活性化させていくか、という提案を実習の中で行っている。「空き家一つをどう使うかということ自体より、それを通した地域全体の作り直し、といった視点を大事にしながら活動をするように」と学生たちを指導している。

（川本センター長）補足すると、授業やゼミのなかで統計データを用いて、日本の空き家の現状をしっかりと伝えて現場に出ている。また、お膳立てをしてプロジェクトを進めるのではなく、実務としてのプロジェクトを学生と共に進めるという形式。なかには頓挫するものもあるが、そのなかでもどうにか実施しているというのが現状であり、本学の活動の特徴的なところでもある。

（高野委員）2 点お聞きしたい。①アクションプランレビューの海外留学の内容を見るに、コロナ禍の影響でなかなか派遣も受入れも難しかったものと思うが、自分自身が学生時代にオーストラリアに留学し、そこから英語の教員免許を取得し現在に至った経緯もあり、海外留学は大変貴重な経験であると考えている。今後の改善の見通しや計画、Zoom などコロナ禍を踏まえたプログラムをどう考えているか。②自分は星槎国際高校に勤務しているが、本校（星槎）の卒業生が現在富山国際大学で活躍しておりパンフレットに掲載されていることを聞いたところであり、大変うれしく思う。本校（星槎）は通信制の高校であり、中学校時代は不登校などほとんど学校に行けていなかったような子が高校で元気になり、さらには大学においてお世話になり、学祭などで中心的存在として活躍していると聞いた。一方で、本校（星槎）ではコロナ禍で不登校生徒が増えて来ており、Zoom 等ではなかなかメンタルのケアも難しい状況が訪れている。心のケアや、発達の課題などについて、大学ではどのように取り組んでいるか。

（大谷学部長）まず留学の促進について、現代社会学部ではさまざまな形で学生が海外に出て行くプログラムを用意している。英語国際キャリア専攻の学生は、2 年次の後期に必修化しており、現在当該専攻の学生が英語圏に留学しているところ。しかしながら、英語国際キャリア専攻を志望する学生が他の専攻と比べ減っている。留学費用の問題が最も大きな要因と考えるが、どのようにすれば少しでもハードルを下げられるか、という点が今後の課題であると捉えている。また、長期留学ではなく異文化研修という形で、教員が引率し海外へ赴くタイプの研修も設けており、徐々に海外に出られるような情勢になって来ていることも踏まえ、次の春休み中に実施できるのではないか、という状況。また、二つ目のご質問について、対人関係が苦手な学生や引きこもりがちな学生は確かに一定数おり、特に人前で発表がなかなかできないという学生に対しては、個別に Zoom での発表を求めるなど臨機応変に対応している。

（松山学部長代理）子ども育成学部においても、コロナ禍や円安で大変な状況にあったものの、今年の 8 月に、オーストラリアのサザンクロス大学へ 1 名が語学留学した。また来年 2 月には、異文化研修ということで、短期ではあるが、カナダのレズブリッジ大学へ 8 名の学生が参加する方向で準備をしている。また心のケアに関して、大学生は多感な時期、悩みの多い時期にあり、深刻になってからの対応は難しいことから、教職員として鋭く察知するよう努めている。保健室、カウンセラー、学生支援担当と教員が連携し、気になる学生の情報も共有しながら、できる限り早く対応する体制を取っている。

（若林委員長）意見が出そろったということで審議を終了したいと思う。富山国際大学は定員も充足しており、就職率も高い。しっかりと運営が行われており、また改善に向けて努力をしているという印象を強く持っている。今後とも頑張っていただきたい。

6．閉会　　**（以上）**